

詩集「愁ひの実」を出してまでもなく、先生の方からお祝いのお言葉を頂いた。

「今日は市電の車中で貴君の詩集を読んでいる人を見かけてうれしく存じました。いい本ができましたね。本学からも一人ぐらいいは詩人が出てほしいと存じました。」とお便りに、ぼくはすすんで先生に献本しなかった理由を見つけて恐縮する弱気を取り戻した。今度は勤め先の（学校だけはサボらないようにしなさいね。）といわれることが辛かったのである。それに今度は大学と違って、ぼくは時々学校をサボルだけでなく、二度も、案の定、学校をやめては京都で一度、東京で一度、放浪生活、居候生活を繰り返して、妻子を置き去りにする悪癖が一応納まったかと思うと、今の学校（県立奈良商工高校）に八年も落ち着いたものの、やっぱり時たま、気づい気ままのルンペン癖が出てきては周囲を困らせ果れされる台風が心から体を荒らして吹き抜ける始末である。

こんなものをお目にかけると先生にはいつまでも御心配の種になるばかりだが、不肖のぼくにはこれが精いっぱいのところである。今ぼくは国語の乙で堤中納言物語をやって

いる。先生の評釈をたよりに、うまくいけばいくで、グッと詰まれば詰まるで、一層先生がなつかしい。そしてサンボウカンの頃がなつかしい。それにしても思えば思うほど先生にあわす顔のないことばかりである。気ままがタタッて左眼の焦点はあわなくなり、毒舌の天罰で前歯を欠き、不惑を越したばかりにもかかわらずぼくは老いた。ぼくが老いとい自分の気ままは棚に上げ、あつかましいウヌボレから自分を推して先生の頰輪を察するといふ無礼な暗算が働きかける。これは逆縁の凶兆であろう。願わくはそうあってほしい。いつまでも先生がお元氣であると安心して、ぼくの方がお先へ失礼したいと思われる。

「若い時分には、こう見えても血氣盛んで、これで随分ケンカもしたことがあります。」と講義のあいまに聞いた先生の想い出話が想い出になる。十八のものの昔の話。清水中納言物語のロマンスを開きのがしたことだけが、時代からといはいながら、今にして想えば千載に悔いが残る一大痛恨事である。朝日新聞の「生活のうた」がキツカケとなつて、ぼくは今、地元の大和タイムスに今年いっぱいこの予定で「くらしのうた」を書いて

いる。この連載が終ると単行本になる手筈だが、今度は地方紙という特殊事情は別として、日々の明け暮れに追われる一喜一憂を、小説家志望後日談報告代りに進んで御一読願いたいと甘えたくなる。

清水先生の思い出

滝 典 通

鳥兎効々などという言葉が漸く実感となる年齢になった。清水先生の還暦祝いがつい此の間であつたと思うのに、早くも定年御退職のこと。私が先生に教えを受けた頃は、あの悪夢のような戦いの終盤であつた。先生はその頃文学部長をなさっていられ、後藤先生や

今や故き小泉先生と共に、はげしい食糧の中でもすれば失われ勝ちになる我々の学生の学問への情熱をもえ立たせて下さった。今でもはつきり眼に浮ぶのは、同窓の辻正一、森下幸男両君が応召した時、先生が涙をたたえて激励なさった恩顔である。戦いが熾烈を極めた頃、私は勤務校の児童に付添って、香川県綾歌郡の白峯御陵の麓松山村に集団疎開し、そこで卒業論文を書いた。その頃先生と後藤先生の御二人が白峯に一度行くから案内せよとのことで、心待ちに楽しんでいたが、それも相次ぐ空襲で実現されずにしまった。今でも残念に思っている。

私自身は卒業後京都に帰り健文社に勤めて大学の研究科に籍を置き、戸田茂雄の論文を書いたりしていたので、先生に引きつづいて種々御指導を仰いだ。田中野神町の御宅へも何回か御邪魔した。乏しい戦後の食糧事情の中で、配給のビールの御馳走になったりした。その後私は家の都合で郷里に帰り高等学校に奉職し、以来十数年貧乏暇なしで先生に御拝眉の機を得ない。その間、小泉先生は追放で去られ、後藤先生も又大阪学芸大に転ぜられた。文字通り立命館学部の支柱となつて

後進の持導に生涯を捧げられた先生が、いよいよ定年御退職なさることは我々にとって誠に感慨無量である。私は先生がいつまでも御健康で、堤中納言物語などの特色ある御研究に裕々御余生を楽しまれることをお祈りして止まない。同時に、かつて果さなかった白峯行に是非機を見て、後藤先生と御一緒に誘い致し度いと念願している。

清水泰先生のこと

妹 尾 権

この春、恩師清水泰先生が立命を去られた時、私には一入感慨深いものがあつた。

戦後、私の郷里に大学が新設され、この文学部主任教授として赴任されるという新聞を読んで、先生のお宅へ伺つてその話をした時、先生は立命を決して去らないという御意志の堅きに、いかに立命を愛されていられるかを思い知らされたのである。

思えば、その時の御意志のままに、三十四年の長い年月をひたすら立命のために尽くさ

れながら、しかも、その業績は、ひとえに立命内にとどまることなく、日本の国文学会に大きく寄与された、偉大なわれらの清水先生を、母校立命から失うことは、何としても残り惜しいことであつた。

考えてみれば、卒業生にとって学校とはおかしなところで、母校という感じだけあつても、年が経つに従い恩師が去り、校舎が変わり、そこに誰一人知らぬ者ばかりとなれば、現実にはやはり異郷の感はまぬかれない。私にとって、母校立命は清水先生と共にあつた。身勝手な言い分ながら先生のいられない立命は、考えられないと言つても過言ではない。その清水先生が立命を去られたのである。

国文学界における堤中納言物語の権威者としての先生は、私の言を俟つまでもなく、余りに著名であらう。

先生のすぐれた識見は、この堤中納言が平安時代から鎌倉時代にかけての文学作品、源氏・枕と共にすぐれた作品として挙げたい旨「詳解」に書いておられる。また、王朝の文学は、結構の大であり、行文の優雅典麗であり、構想の奇抜なものなかにあつて、こ